

山茶碗窯出土の土師器皿について

浅田 員由

はじめに

昭和60年5月15日～6月4日まで、愛知県西加茂郡三好町大字福谷字阿弥陀堂地内において、三好町教育委員会によって、2基の古窯跡が発掘調査された。^(注1)2基の古窯は、いずれも13世紀代の、いわゆる山茶碗窯で、その出土品も、ほぼ山茶碗と小皿に限られた、山茶碗専焼窯であったが、このうち1基の窯跡から、土師器の皿及び小皿が、かなりまとまって出土した。

従来、尾張・三河地域では、平安時代末から鎌倉時代にかけて、山茶碗や小皿が大量に生産され、それらが日常食器として使用されているため、住居跡などの遺跡からの、食器としての土師器の出土が少なく、この時期の土師器については、その実態が良くわかっていなかったし、研究もあまり進んでいなかった。しかし、最近では、この地域、特に尾張部で、中世の集落遺跡等の調査が活発に行われ、土師器の出土も増大してきている。このため、今後は、中世土師器の研究が一層進展するものとおもわれるが、この山茶碗窯出土の土師器は、山茶碗と併焼されていることから、ある程度年代が限定できることや、生産の実態が明らかなることから、中世土師器の研究に大きな意味をもっているとおもわれる。特に、これまで、この地方では、中世の出土品として、山茶碗類や古瀬戸類に焦点が当てられており、土師器はその伴出品として扱われるか、あるいは、畿内の編年を適用して年代を与えられたりしていることから考えれば、年代の明らかな土師器の資料が出土したことは重要である。また、全国的にみた場合、中世の遺跡から出土する資料のうち、土師器の占める割合は大きく、畿内や関東など他地域との関連を考えていく上で、土師器の研究は欠くことのできないものである。

このため、この、山茶碗窯出土の土師器について、現在知り得るところを報告し、あわせて従来知られている土師器と比較し、この地域における土師器について若干の考察をおこなう。

1. 土師器を焼成した窯

土師皿及び小皿の出土した窯は、三好町福谷の、いわゆる猿投窯黒笹地区内に所在するごく普通の山茶碗窯である。この窯は、同時に発掘調査を行った、やはり山茶碗窯であるK-G-71号窯に隣接して発見された。この、K-G-71号窯は、既にその存在を知られており、猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告にも記載されており、この発掘調査の途上で、土師器を出土した窯が発見された。その窯は、愛知県教育委員会によって、K-G-87号窯の名称を与えられた。

K-G-87号窯は、県道豊田知立線が福谷の集落の北で東に分岐し、豊田市に延びる町道の北側に位置している。周辺には、陰刻花文の陶片を出土しているK-18号窯や灰釉陶末期のK-21号窯などが存在しているが、黒笹地区の中では、割合に古窯跡の稀薄な地帯である。

本窯は、町道によって煙道部の一部を削平されていたが、窯体は、ほとんど残存していた。ただ、分炎柱の半分と燃焼室の一部は、かつて通水管を埋設した時に破壊されていた。また、前庭部の大部分と灰原部分は、水田となっており調査できなかったが、水田改良工事によって、ほとんど消滅しているものとおもわれた。

窯体の残存全長は12mで、分炎柱から3mのところを最大幅2.9mを計測する。焼成室の長さは約6m、床面傾斜は30度である。焼成室には水平面がなく、分炎柱から煙道部まではほぼ同じ傾

斜で続いている。燃烧室は長さ約5mで、幅は2mほどである。燃烧室の床は分炎柱から焚口方向に、約10度の傾斜で上っている。ただ、分炎柱から2mくらいは、通水管の埋設によって深く掘りこまれており、その部分の状況は不明である。分炎柱は、主軸方向にやや長い楕円形を呈しており、長径で約1mくらいである。

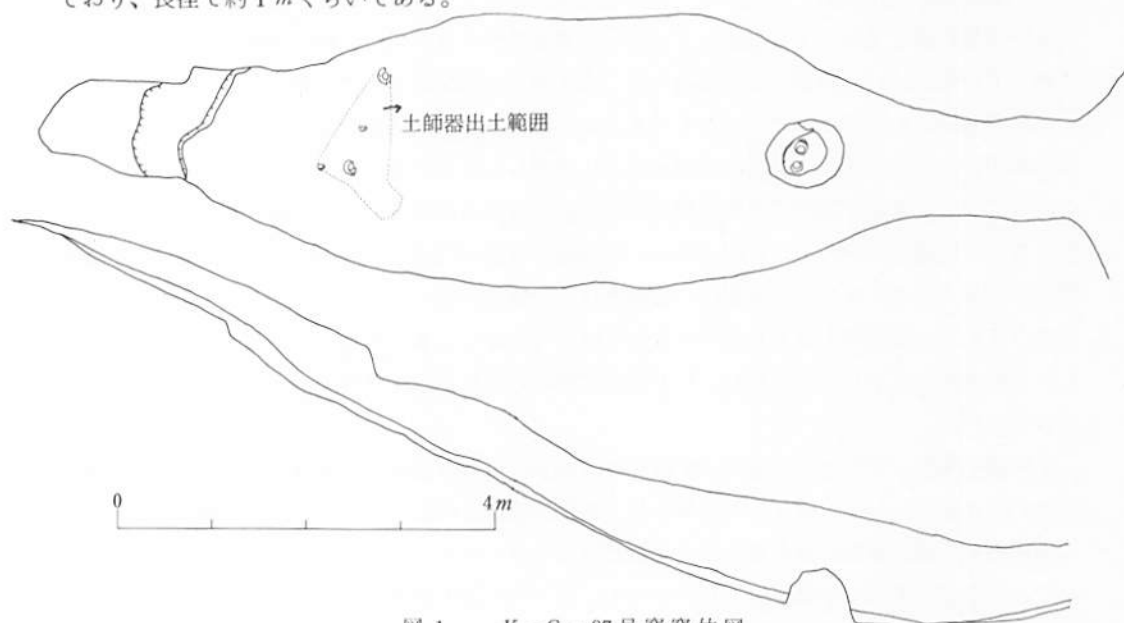


図1 K-G-87号窯窯体図

天井はすべて崩落しており、壁の残存状況も良くない。床はあまりよく焼け締っておらず、床面は赤褐色を呈している。床には、焼台はほとんど残っていなかった。

本窯の出土品は、土師器を除けば山茶碗と小皿である。山茶碗は、すべて粗雑で低い高台が付けられている。底部の糸切痕はそのままである。形状は、底部から直線的に引き上げられた、胴の張りのないもので、口径に対して高さの大きい、円錐形の頂部を切り落して逆にした様相を示している。平均的な法量は、口径12~13cm、高さ4.5~5.5cm、底径6~8cmくらいである。胎土は砂質で、長石粒がふき出しており、良く焼け締っているがもろい。

小皿は、円板の端をわずかに立ち上がらせて口縁とした、きわめて浅い皿である。底部は糸切り痕をそのまま残し、高台はない。平均的な法量は、口径8~9cm、高さ1.5cm、底径4~5cmくらいである。口縁の立ち上がりは1cm未満である。胎土は、砂まじりで、焼成は良好である。

以上、K-G-87号窯の窯体と遺物について簡単に述べてみた。勿論、詳細については本報告をまたなければならないが、現時点で知り得るところでは、猿投窯黒笹地区に普通にみられる山茶碗窯である。同時に発掘したK-G-71号窯の窯体並びに出土遺物と比較しても、何らの特殊性も認められない。

K-G-87号窯出土の山茶碗と小皿の形体は、昭和58年に三好町教育委員会によって調査された、三好町打越に所在する、三本松古窯ときわめて類似しており、ほぼ同時期のものと考えて間違いないとおもわれる。このことから、K-G-87号窯の年代は、13世

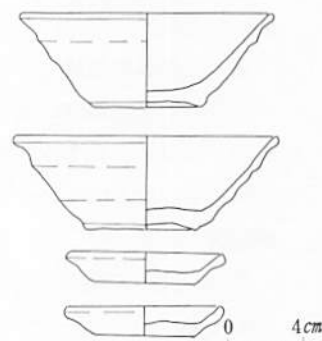


図2 山茶碗・小皿

紀後半とみることができる。

2. 土師皿の出土状況

K-G-87号窯は、天井がすべて崩落し、壁の残存状態も悪く、破壊の著しい窯であった。このため、窯内出土の山茶碗・小皿類も、焼成室上部にはほとんどみられなかった。更に床面も、あまり堅く焼け締っておらず、剥離しているところも多かった。当然、焼台が床面に固着したのも残っていなかった。焼成室の下部からは、山茶碗・小皿が出土している。

土師器が出土したのは、分炎柱から4.5mほどの、焼成室上部で、窯の中央部に1mくらいの幅に集中していた。出土土師器の大部分は床に付着した状況で見つまっているが、床面が良く焼け締っていないため、実際にこの位置の床面に置かれてあったものかどうかは判然としない。ただ、この土師器の集中していた周辺には、山茶碗、小皿の出土はきわめて少なく、ほとんど土師器だけがみられた。また、土師器は、積み重なった状態で押しつぶされており、下の小破片は床にめりこんでいるものも認められた。なかには、形を保ったまま押しつぶされているものもあった。これらのことから、土師器が、この位置で焼成された可能性は高いが、今の時点では明らかにし得ない。

土師器の集中して出土した部分の床面には、何らの特殊な施設、構造はみられなかった。床面の傾斜には変化がなく、ピットもなかった。また、焼台とおもわれるものもみつっていない。

本窯内からは、山茶碗や小皿の生焼け製品はみつからなかった。また、分炎柱の付近からは、かなりの量の山茶碗や小皿が出土しているが、ここからは土師器はみつっていない。さらに、一部確認できた、燃焼室および前庭部からも土師器の出土は認められなかった。

これらのことから、土師器は、焼成室の上部の一定の範囲内に置かれて焼成され、しかもあまり大量に焼成されなかったことが推測できる。また、窯内から生焼けの山茶碗・小皿類が出土しなかったことは、焼成途中の事故によって窯が放棄されたものではなく、焼成後、製品を取り出した後に廃棄したことを物語っている。更に、大量の土師器が取り残されていることは、この窯が焼き上って、窯出しをする前までに、崩落したことを推測させる。土師器は衝撃に弱く、天井や壁の崩れによって簡単に押しつぶされ、床面にまでめりこんでしまうが、焼成後の山茶碗・小皿の多くは無傷で残り、それらは製品としてきれいに取り出され、破壊した土師器だけが残されたまま、この窯は廃棄されたのではなかろうか。

このように考えた場合、土師器は、焼成室の上部に置かれ、山茶碗や小皿と一緒に焼かれていたことが理解できる。また、一度に焼成された量は、窯の規模からみてそれほど多くないものであったといえよう。

3. 土師器の形態

出土した土師器は、皿と小皿の2種類である。細片が多く、個体数を確認することは困難であるが、少なくとも100個体以上は確認できる。胎土は、よく精製され、固く焼き締まるものと、砂質でもろいものとがみられる。また、轆轤で引き上げたものと手びねりのものがあり、主体は轆轤製である。

皿は、次の4類に大別することができる。

第1類

体部が丸味をもって引き上げられた浅い碗型をしている。轆轤づくりで、薄く仕上げられてい

る。内面はていねいになでられている。底部には糸切り痕が残っている。口縁はやや内側に向いている。胎土は、やや砂質であるがよく精製されており、きめが細かく良好である。砂粒はほとんど混っていない。焼成もよく、堅く焼け締って、赤褐色を呈している。

平均的な法量は、口径13cm、高さ3cm、底径6cmくらいである。口縁の立ちあがりは2.5cmほどである。底の厚さは0.7cm、胴部の厚さは0.5cmと、底がやや厚い。

第2類

第1類と比較してやや小型である。体部は開き気味で、より浅くなっている。胎土は良質で、堅く焼け締っている。轆轤で作られており、底部には糸切り痕が残っている。内面はていねいになでられている。口縁端は、引き上げられたままで内湾していない。

法量は、口径12cm、高さ2.5cm、底径5.5cmくらいが平均である。口縁の立ち上がりは、2cm、底の厚さは、0.5cmくらいである。

第3類

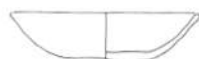
手びねりの皿を第3類とする。細かく分ければ、更に分類できるのかもしれないが、ここでは大きく1類としておくことにする。体部は直線的で開き気味である。口縁は細く作られ、口縁端は直立するように折り曲げられ段状となっている。底部は、無造作に切り離されており、細い板状の圧痕がみられるものが多い。胎土は、砂質分が多いが精製されている。焼きあがりはあまり良くなく、生焼けのようにみられる。全体に白っぽい色をしており、胎土の内部が灰黒色を呈している個体が多い。

手びねりのため、体部や底部は厚めであるが一定しておらず、法量も変化が大きい。平均的な法量は、口径12.5～13cm、高さ2.5～3cm、底径7.5～8cmくらいである。底部の厚さは、1.1cmであったり0.5cmであったりまちまちである。胴部は0.8cmほどである。

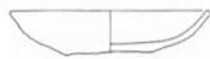
第4類

見込みの深い、むしろ碗に近いタイプである。胎土は砂まじりで、山茶碗の生焼け製品のような感じがするものである。体部は丸味をもたず直線的に引き上げられている。轆轤づくりで、底部には糸切り痕を残すものと、ヘラで切り離されたものの両者がみられる。高台はつけられてい

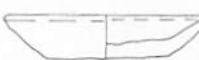
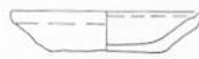
第1類



第2類



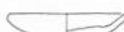
第3類



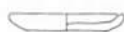
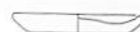
第4類



第5類



第6類



ない。あまりよく焼け締っておらず、もろい。色は白色を呈しており、第3類に近い焼き上がりである。

法量は、口径13cm、高さ3.5cm、底径7cmほどが平均値である。底部は厚く、1.2cmくらいある。見込みの深さは、2.8cm以上ある。

皿類は、上記のように4類に大別することができるが、数量的には、第1類、第2類が圧倒的で、全体の95%以上を占めている。第1類と第2類の比率は、小破片が多いこともあって明らかではないが、第1類の方が多いようである。次いで多いのは、第3類であるが、手びねりで作られているため、器体の厚さも一定しておらず、器形もバラつきが多い。第4類は数量的に最も少なく、わずか数個体が出土しているにすぎない。これは、調査中は、山茶碗の生焼け製品かとおもわれたものであるが、器形、製作技法、法量等、いずれも伴出の山茶碗とは異っており、やはり土師器とすることが妥当といえる。

また、この他に、分類のいずれにも属さず、かといって山茶碗ではないものが数個体みつまっているが、ここでは特に触れないものとする。

小皿は、いずれも轆轤づくりで、手びねりのものはみつかっていない。器形は、ほとんど陶器の小皿と同じタイプである。体部の立ち上がりが浅く、中には底部が厚いため、ほとんど内容積のないものもみられる。小皿は、手びねりのものがないので、次の2類に大別できる。

第5類

体部の立ち上がりがはっきりしていて、見込みの側に折れ目がみられるものである。陶器の小皿と非常に良く似ているが、胎土は、第1類と同様、精製された良質のもので、良く焼け締っている。色は、赤褐色あるいは暗赤褐色を呈している。

法量は、口径7.5cm～8cm、高さ1.2～1.5cm、底径5～6.5cmの範囲におさまる。厚さは差が大きく、特に底部は著しい。立ち上がりの高さは、0.5cm～0.8cmくらいである。

第6類

体部の立ち上がりがはっきりせず、円盤状の粘土の端を少し反らせた感じのものである。立ち上がりが緩い分だけ、第5類と較べて口径が大きくなっている。また、第5類と比較して、胎土が厚く、底部が盛り上っているものが多い。その他、胎土、焼成等について第5類と同じである。この類の小皿は、わずか数例みられるだけで、はたして分類することが妥当であるかどうかは、今後の調査にまたなければならないが、今回はこのように区分しておく。

以上が出土した土師器の種類であるが、第1類～第4類の皿と第5・6類の小皿の比率は、前者が圧倒的に多い。個体数の確認が困難なため正確な数値としてあらわせないが、10:1くらいの割合であろう。

4. 土師器と山茶碗

K-G-87号窯の土師器以外の出土品は、山茶碗と小皿である。他には、鉢が1点みつまっているだけである。隣接のK-G-71号窯からは、片口鉢、鉢、陶丸が出土している。しかし、数量はごくわずかで、この2基の窯が山茶碗と小皿の専焼窯であったことは確かである。

K-G-78号窯出土の山茶碗は、すべて轆轤水挽きで、底部に糸切り痕を残している。高台は低い粗雑な付け高台で、底部との押さえも簡単にしてあるため、高台のはずれた個体もかなりみられる。体部はやや開き気味に直線的に引きあげられている。口縁端は、いく分外反しているもの

が多い。体部には、轆轤で引き上げた痕が明瞭に残っている。胎土は、黒笹地区の山茶碗に普通にみられる、砂粒を多く含んだもので、良く焼けているにもかかわらず、ガサガサした感じでもろいものである。

法量は、口径13～14cm、高さ5cm、底径6.5～7cmくらいが平均的な計測値である。

小皿は、体部の立ち上がりの小さい浅いもので、高台はつけられていない。胎土や焼成は山茶碗と同様である。なお、土師器の小皿と同様に、立ち上がりがはっきりして、見込みの側に明瞭な段のつくものと、緩やかなものがある。

法量は、口径8cm、高さ1.5～2cm、底径5.5～6cmくらいが平均的数値である。見込みの深さは、0.8～1.2cmくらいあって、内容積は大きい。

以上の、K-G-87号窯出土の山茶碗・小皿は、この地区における典型的な製品であって、何らの特殊性はみられない。また、土師器と比較して、胎土、器形、法量など、明らかに別のものとして製作されている。特に、器形の類似している小皿についても、底部の切り離しや法量的など、また、口縁端の処理などに違いがみられる。特に、胎土がまったく異なることは、これらの土師器が、山茶碗生産の余事として行われたのではなく、明らかに土師器製作の意志のもとに行われたことを物語っている。また、この地方でもよくみられる、土師器の甕類が出土していないことは、K-G-87号窯における土師器の生産が、そうした日常調理具としての土師器生産とは異なるものであった可能性がある。

5. 周辺地域における土師器皿の出土

猿投窯や瀬戸・常滑窯をひかえる愛知県地方では、山茶碗や瀬戸の平茶碗類などが大量に供給されているため、中世の遺跡からの土師器の坏・皿類の出土が少なく、従って、これまであまり重要視されてこなかった。しかし、最近では、中世の生活遺跡が調査される機会が増大したこと、またそうした調査がかなり大規模に、しかも継続的に行われるようになってきたことから、土師器の坏・皿類の出土が増えてきた。勿論、近畿地方や関東地方などと比較して、遺跡出土遺物のなかで土師器の占める比重は小さく、また、山茶碗、古瀬戸など中世陶器の研究が進んでいることもあって、土師器出土の増大が、ただちに調査の結果に大きな影響与えるものではないが、それでもこの地方における土師器の研究がまたれるようになってきていることも確かである。ここでは、これまでの中世土師器の出土と、研究について紹介する。

(1) 尾張国府跡の出土土師器

尾張国府跡は、その所在地である稲沢市教育委員会によって、昭和52年から調査が進められてきている。ここは、国府が置かれてから、中世に尾張守護所が下津城に移るまで、文字通り尾張の政治の中心地であったところである。それだけに、その遺跡から出土する遺物は、この地方における消費生活用品の総体を示しているに違いない。土師器の皿類についても、数次の調査でかなりの数量が出土しており、編年的な考察が行われている。

これは、出土した土師器の皿を、A類、B類、C類、D類の4形式に大別し、さらにそれを細分している。A類は轆轤水挽き成型されたもので、山茶碗の小皿に相当するタイプである。B類・C類は手びねり成型のもので、その中でやや大型で深めのものがB類、小型で浅いものがC類とされている。D類は、手びねり成型の小皿で、口縁が内側に折りこまれているものである。

このなかで、B・C類の皿と平安京出土品を対比させて、これらの土師器に、平安後期から鎌

倉前半期の年代を与えている。この年代は、やや幅があり過ぎるものの、これらの土師器の中で最も出土量が多いとされているA₁類が、鎌倉期前半の陶器の小皿に非常に良く似たものであることから妥当性がある。しかし、轆轤成型と手びねり成型の土師器が年代の差として煤えられるのか、産地の違いなのか、あるいは用途によるものかなど、まだ不明の点が多く、今後の研究がまたれるところである。

また、報告の中では、小皿のなかには、煤の痕跡が認められるところから、灯明皿として使用されたのではないか、という推定がなされている。

(2) 朝日西遺跡の出土土師器

朝日西遺跡は、愛知県西春日井郡清洲町に所在する複合遺跡で、弥生遺跡として著名な貝殻山貝塚と近世の城郭遺跡である清洲城の間に位置する遺跡の総称である。ここでは、昭和57年以来、愛知県埋蔵文化財センターによって継続的な調査が行われている。この調査によって、この地域が13世紀から14世紀の間と16世紀後半から17世紀初頭の時期にピークをもつ、中世から近世にかけて遺跡であることが判明してきた。この朝日西遺跡からかなりの土師器が出土しており、その編年も試みられている。^(注4)

朝日西遺跡の土師器皿は、A類とB類に分類されている。A類は轆轤成型のもの、B類は手びねり、型押しなど非轆轤成型のものである。さらにA類は6形式に、B類は5形式に分類されている。

また、ここでは、A類とB類は、一部混在して出土するものの、基本的には出土した遺構が異なることが指摘されている。そして、他地域における類似性や共伴遺物の年代などから、A類がB類に先行するタイプであるとしている。つまり、A類は11世紀後半から12世紀後半までを主体とし、B類は12世紀後半に出現し、一時混在するが、13世紀以降はB類のみで構成されるという結論が与えられている。

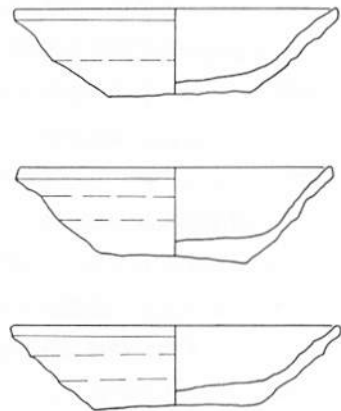
この周辺は、16世紀以降に尾張の中心となる清洲城の外郭を形成するところで、また、尾張国府や守護所の置かれた下津城とも近接の地域で、この遺跡の状況は、当時の尾張国の実像をかなり反映しているものといわざるを得ない。そのため、この遺跡における土師器の研究は、少なくとも尾張地域の土師器の指針となるものであり、今後の一層の進展がまたれるところである。

(3) 日進町米野木神明社出土土師器

愛知県日進町米野木の神明社から3点の土師器皿が出土している。昭和28年頃出土したものといわれており、出土状況については明らかでない。しかし、出土場所が、猿投窯の中心ともいえる地域であり、またK-G-87号窯とも近いため、中世の土師器を考える上で貴重な資料とおもわれるので紹介する。

成型は轆轤水挽きで、底部には糸切り痕を残している。皿というよりは碗に近いもので、K-G-87号窯の第4類に近いタイプである。体部は斜めに直線的に引き出されている。胎土は砂まじり、あまり堅く焼き締っていない。

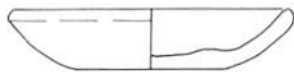
法量は、口径12.3cm、高さ3.7cm、底径5.7cmくらいである。見込みの深さは2.5～2.7cmほどである。



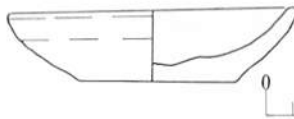
3点ともほぼ完器で、いずれも口縁端に1ヶ所、煤が付着していることから、窯跡の出土品ではなく、灯明皿として使用されたものであることの可能性が大きい。

(4) 長光寺製塩遺跡出土土師器

長光寺製塩遺跡は、東海市名和町の長光寺境内に所在する製塩遺跡である。しかし、瓦が出土していることから、古代の寺院が存在していたことも窺われ、近世に至るまでの遺構が重複して検出されているところである。ここから、細片を含めて10点ほどの土師皿が出土している。胎土は精良であるがやや軟質で、淡褐色を呈している。成型は轆轤水挽きで、底部には糸切痕を残し



ている。口径は11cm、高さ2.5cm、底径5cmくらいで、陶器の山茶碗と小皿の間ほどの大きさである。



見込みには煤が付着して、ここが寺院跡であることから考えても、灯明皿として使用された可能性は大きい。他に、手びねりの小型土師皿も出土している。(注6)

以上、4遺跡の出土土師器を紹介したが、勿論、これ以外にも、中世の生活遺跡からはほとんど出土しているが、その量は多くない。

6. K-G-87号窯出土土師器との比較

前章でみたように、当地方では土師器皿の出土は決して多くない。少なくとも、県内では最も大規模に調査の続けられている、環状2号線関連の清洲町内の調査においても、土師器の出土量が少ないことは、おそらく尾張地域全域の傾向といっても差し支えないであろう。これは、この地域が、山茶碗や古瀬戸など中世陶器の産地で、近畿地方や関東地方のように、土師器の坏や皿が食器として大量に使用されなかったためであろう。事実、これらの遺跡では、山茶碗や古瀬戸などの中世陶器が大量に出土している。にもかかわらず、かなりの土師器が存在する理由は何であろうか。

一つの考え方としては、土師器が特殊な目的をもって使用されたということである。その1例が、国府跡や長光寺遺跡、米野木神明社などから出土した土師皿である。これらには、煤の痕跡がみられ、灯明皿として使用された確率は大きい。勿論、これらの遺跡から出土したすべての土師器が灯明皿であったとは考えられないが、土師器を灯明皿として使用することは、かなり普遍的であったものとおもわれる。その場合、灯明が一般的な灯火であるか、あるいは御神灯であるかによって灯明皿の性格が異なる。前者であれば、一般の生活用具であり、後者であれば、それはきわめて宗教的なものとなる。当時の状況からいえば、一般的な灯火というよりは、御神灯の意味合いが強いようにおもえる。このことは、この地方においては、土師器が、伝統的な生活様式を固守するものであったことを示している。つまり、土師器には、儀式用の具としての認識があったのではないかということである。もしそうであれば、山茶碗窯で生産された土師器はどのような性格をもつものであろうか。このことを考えるために、K-G-87号窯の出土土師器と先にあげた土師器を比較してみる。

先にあげた遺跡出土土師器のうち、轆轤成型のものは、国府跡のA類、朝日西遺跡のA類、米野木神明社出土品、長光寺遺跡出土品であるが、形体は各々異なる。このなかで、K-G-87号窯の第1類と対応できるものは、朝日西遺跡のA₁類である。A₁類の口縁部が直立気味である分、器高が大きくなっているが、法量と器形はよく類似している。しかし、胎土、焼き上がりは、第1類の方がはるかに良好である。これは、焼成した窯の差が表われているともいえる。

K-G-87号窯の第4類は、米野木神明社出土品と類似している。これらの土師器は、山茶碗に近いタイプで、法量もあまり差がない。ただ第4類は、胎土と焼き上がりにバラつきがあり、精製胎土のものや白色を呈するものがみられる。しかし、出土地の近いことから、両者に深い関連のあることは間違いないところとおもわれる。

K-G-87号窯の第5類、第6類の小皿のタイプのもは、朝日西遺跡のA₄類に近い。この小型の皿は、手びねりでも作られており、同遺跡のB₃類や国府跡のC類にみられる。

長光寺遺跡の出土品は、第1類に良く似た器形であるが、法量がひとまわり小さい。焼き上がりは軟質であるが、胎土はよく精製されている。

手びねり成型のものは、対応できる器形がみあたらない。これは、K-G-87号窯の製品が轆轤成型を主体としていて、手びねりは極めて少ないことや、国府跡及び朝日西遺跡では、畿内地方や関東地方など、土師器生産地の影響を強く受けているためであろう。このことは、伝統的な土師器生産と中世陶器生産のかたわらで付随的に行われる土師器生産の間には、大きな差のあったことを窺わせる。

さて、問題は、K-G-87号窯が山茶碗の編年から、13世紀後半の年代を与えることができるものとするならば、国府跡や朝日西遺跡の土師器とは、年代からいって対応させることが不合理であるということである。特に、朝日西遺跡では、轆轤成型によるものが、12世紀いっぱいまで終わっているということは、K-G-87号窯の土師器流通の上で大きな意味をもっている。尾張の中心部といってもよい朝日西遺跡から、13世紀代以降の轆轤成型の土師器がないとすれば、この技法が一端消滅したことを意味している。少なくとも、尾張の中心地域からは消えたのである。そして、13世紀後半に、K-G-87号窯で再現されたとしても、それは極めて地域的な需要を満すにたりないものであったのである。

7. K-G-87号窯の土師器の意義

これまでみてきたように、当地方では、山茶碗や古瀬戸など中世陶器の産地であることから、土師器の出土は極端に少ない。しかし、最近になって中世遺跡の調査が急激に進行してきたため、出土土師器も増加してきた。そして、国府跡の出土品による編年試案を皮きりに、現在では、環状2号線関連遺跡の出土品を主体として、愛知県埋蔵文化財センターによって編年が試みられている。おそらく、今後の資料の増加をまって、一層研究が進むものとおもわれるが、ここで、生産遺跡であるK-G-87号窯出土の土師器について、若干の考察を試み、今後の研究の一助としたい。

(1) 製作について

製作技法としては、轆轤成型と手びねり成型の2法がある。轆轤水挽きの成型技法は、灰釉陶器以来の猿投窯の伝統で、山茶碗にも継承されている。この土師器が山茶碗窯で焼成されていることから、その技法を応用していることは、むしろ当然である。しかし、明から器形が異なり、また胎土も精製した良質のものを使用していることから、この土師器の生産が、突発的あるいは衝動的なものであったとは考えられない。しかも、かなり水準の高い、よく焼け締った製品の他に、軟質で手びねりのものが少なからず存在していることは、伝統的技法による土師器も必要とされていたことをおもわせるのである。つまり、食器としての碗・皿であれば、実用的には山茶碗・小皿で充分である。特に小皿については、きわめて類似のものがみられるのである。にもかかわらず土師器が必要とされるとすれば、山茶碗類の供給が不十分であるか、土師器でなければならない理由によるものであろう。前者は、この地方の山茶碗窯の膨大な数量や生活遺跡からの出土を考えれば、少なくとも、当時この地方の中心地であった、国府跡や朝日西遺跡には十分な供給がなされていたことは間違いないであろう。後者については、それを明らかにすることは困難である。しかし、少なからず灯明皿として使用されていることは、その理由の1例とはなるであろう。また、手びねりの皿が、轆轤製品とは胎土も異なり、しかも焼き上がり白色を呈するこ

とは、一つの示唆を与えている。

本来、山茶碗窯は、単一品種の大量生産をめざすもので、実際、その方向で発展してきている。しかし、少量の土師器を焼くためには、胎土も技法も異ならせているのである。この、焼き上がり白色の土師器は、第4類にもみられ、器形は異なるものの、白色ということを意識しているものと考えられる。ここでは深く触れないが、それらは、この地方でいう、白色土器とかかわりのあるものであろう。

(2) 生産と流通

現在のところ、山茶碗窯で焼成された土師器の例は、K-G-87号窯が唯一のものである。このことは、これが普遍的なものではなく、むしろ例外的なものであることを示している。しかし、胎土の選択や製作の技法が、山茶碗のそれと明瞭に異なることは、土師器の製作に、土師製作工人の存在を窺わせる。また、12世紀段階ではあっても、轆轤水挽きによる土師器が存在していることは、この生産が、K-G-87号窯に限定される特殊なものではなく、量的には少ないといえ、継続して行われてきたことおもしろい。しかし、土師器が特殊な用途に使用されるものであって、その量も多くないとすれば、消費地の近くで生産することが有利である。国府跡や朝日西遺跡で出土する手びねりの土師器は、その周辺で小規模に生産することも可能である。特に、この両遺跡では手びねり土師器が卓越していて、器形の変化が大きいかことは、生産の多様性を示しているようである。

また、轆轤成型で、K-G-87号窯の製品とも対応できると考えられる、長光寺遺跡や米野木神明社の出土品が、いずれも灯明皿として使用された可能性の大きいことは、この種の土師器の用途を示唆していて興味ぶかい。しかし、その場合でも、その供給範囲はそれほど広いものではなかったであろう。堅く焼け締まっているといえ、山茶碗などの陶器と比べれば壊れ易く、しかも慎重な配慮をもって遠くへ輸送するメリットもないとすれば、やはり近くの需要に応える製品であったのであろう。つまり、窯業地帯では土師器だけを焼くよりも、その窯を利用する方が有利であったに違いないのである。この場合、土師器の生産は、山茶碗工人の副業としてではなく、土師器工人によって行われたであろうことは、第1類の土師器をみても想像に難くない。

おわりに

K-G-87号窯から出土した土師器は、この地方における中世土師器の研究に新しい資料を加えるものであるが、現在のところ、これに類するものは、生活遺跡からは出土しておらず、生産地と消費地を直接に関連づけることは困難である。しかし、尾張の中心地域で進められている土師器の研究に新しい視点を与えるもので、その研究がより広い視野に立って行わなければならないことを示唆している。また、現在、尾張の中心部で行われている、大規模で継続的な調査が、山茶碗窯の存在する周辺地域で行われるようになれば、その出土が増大し、中世土師器のあり方ははっきりしてくることは確かである。

注1. 報告書は作製中であるが、三好町教育委員会の御好意により、報文することを許された。

注2. 「三本松古窯跡群発掘調査報告書」 三好町教育委員会 1985年

注3. 「尾張国府跡発掘調査報告書」 稲沢市教育委員会 1982年

注4. 佐藤公保 中世土師器研究ノート(1) 一朝日西遺跡の様相―「財団法人愛知県文化センター 年報 昭和60年度」 1986年

注5. 日進町文化財保護委員 加藤秋成氏の御教示による。

注6. 「尾張長光寺製塩遺跡」 東海市教育委員会 1986年



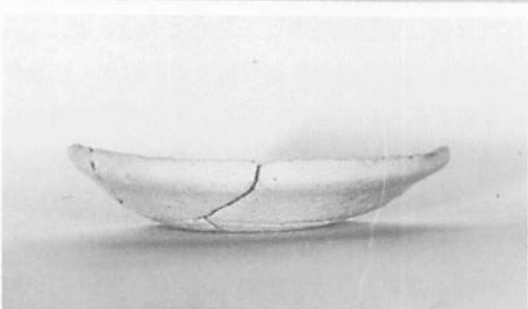
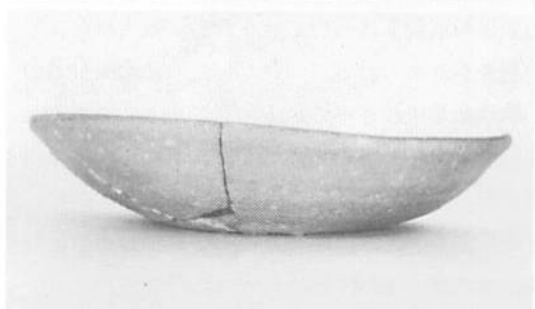
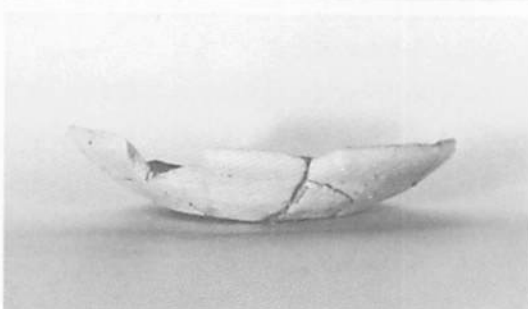
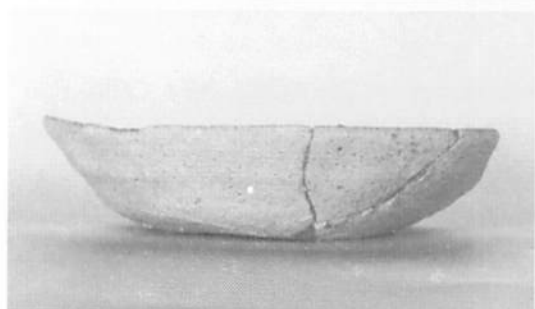
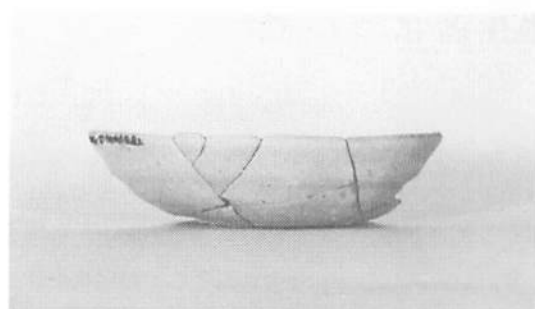
K-G-87号窯全景



K-G-87号窯（煙道部より）



土師器出土状況



土師皿及小皿